

アンティゴネ神話

—その文学的受容と改編について—

関 口 なほ子

1

紀元前5世紀にアテナイで発展し始めたギリシア悲劇は神話を題材に演じられてきた。なかでもディオニュソス祭礼 (Dionysuskult) との結びつきが強いアンティゴネ神話を戯曲化したソポクレス (Sophokles, ca. 497/496-406 v. Chr.) は、主権者によるポリス社会の維持並びに法の制定、神々に対する人間を問題視した。

「恐ろしいもの」は多々あるが、善と悪をなす「人間」よりも恐ろしいものはない—コロスの合唱で幕をあげるソポクレスの『アンティゴネ』はさまざまな対立の諸原理に貫かれている。国益のために他国を占領する主権者の絶対的な「命令」に従った結果、敵対することになるオイディプスの二人の息子ポリュネイケスとエテオクレス。二人の妹であるオイディプスの娘アンティゴネ。この兄弟が相打ちの果てに死に、王クレオンの策定による反逆者ポリュネイケスの埋葬を禁じる法に従わず、彼の埋葬を決行し囚われるアンティゴネ。彼女は「石打ちの刑」ではなく、死ぬまで地下に幽閉されることになり縊死する。

ポリス社会において、古代ギリシアの神々と人間との緊密なかかわり方の証である「埋葬」の是非は、「社会 (国家共同体)」と「個人」の対立、自然法と主権者の法との対立にしばしば置換される。視点を変えれば、権力者である年上の「男」と反逆者の位置に置かれる若い「女」との対立やポリス社会を構成する「生者」と冥界を支配する「死者」(宗教とポリスの対立)との構図に重なる。悲劇の帰結は、対立項いずれかの、または相互の破滅、あるいは第三の止揚された構造をとるのが常である。ソポクレスの『アンティゴネ』ではクレオンを除く王家の人間たち、アンティゴネ、彼女の婚約者クレオンの息子ハイモン、クレオンの妻エウリュディケの自

死の後、王国もろともクレオンの破滅が予言される。息子は父の「法」の裁定に失望し、妻は息子の死に絶望する。これらの死の連鎖は失われた愛の反動ともとられるが、そこには「自己破壊的な対等性」¹⁾がみられる。

このような対立の構図をもつ『アンティゴネ』のモチーフは、近現代文学において、時代と作家の内的必然性と文学的要求に応じて改編されている。ホーフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal, 1874-1929)、ハーゼンクレーバー (Walter Hasenclever, 1890-1940)、コクトー (Jean Cocteau, 1889-1963)、アヌイ (Jean Anouilh, 1910-1987)、ブレヒト (Bertolt Brecht, 1898-1956)、ホーフート (Rolf Hochhuth, 1931-), ラングゲッサー (Elisabeth Langgässer, 1899-1950)、ヴァイル (Grete Weil, 1906-1999) の作品等、事例は枚挙にいとまがない。それらの多くが権力者への抵抗や反逆をつうじて、「人間の自由」を求める「自我の実体」を取り上げ、「不可思議なもの」「恐ろしきもの」とされる「人間」の本質を問うものとなっている。以上の点を踏まえ、第一次・第二次世界大戦を背景に書かれたハーゼンクレーバー、アヌイとブレヒト、ヴァイルの〈アンティゴネ〉から、どのような問題が提起されうるか考察する。

その前提として、ソポクレスの『アンティゴネ』における問題点 (論者の関心) を挙げておく。①アンティゴネの行動は「敬虔な反逆行為」(fromme(r) Freveltat, V.74)²⁾であり、その結果死ぬことは「美しい」。³⁾これがアンティゴネの美の基準であり、埋葬が遂行されない段階における救済を致命的な「恥」とする。②国家の法への侵犯行為に対するイスメネの見解は、「女」は「男たち」すなわち「支配者」による「権力の掟に逆らうことはできない」(V.61f.)。③アンティゴネはイスメネの主張を「口実」(Vorwand, V.80)として、彼女を「憎む」(V.93)だけでなく、死者の「憎しみ」(死者から憎まれる, V.94)を増すだけであるという。⁴⁾④だがアンティゴネの生の格率は、「憎しみを共にするのではなく、愛を共にする」こと、⁵⁾または「敵になるためではなく、友になるために」(V.523f.) 行動することである。⁶⁾⑤クレオンの没落に際した、コロスによる結語は「思慮こそは最高の幸福」(V.1348f.)であり、人間に「神々の領域を冒瀆することは、決して許されない」(V.1349f.)⁷⁾というものである。

ヴァルター・ハーゼンクレーバー (Walter Hasenclever, 1890-1940)⁸⁾ の戯曲『アンティゴネ』(Antigone, 1917) は第一次世界大戦を背景にした5幕の悲劇である。そこには、ソポクレスの『アンティゴネ』を下敷きにしつつ、固有名をもつ王侯や予言者を除き、テーバイの民、市民、軍人、リーダー(統率者)、青年、女、少女、子供、貧しいものたち等、さまざまな階層の無名の登場人物が混在する。「夫たちは死んだ」(S.16)と困窮して食物や仕事を欲する「民」(「女」その他 S.29f.)、平和を望み反戦を訴える市民。若さを誇る者は「男たちは生まれる。戦争は美しい」(S.16)、「世界は広い。多くの敵を制圧し、前進せよ、不滅だ」(S.17)とアルゴスとの戦いの勝利を喜び、戦争を賛美する。その「声」に祖国が救済され、国王を賞賛する「叫び」(S.18)が加わる。

ハーゼンクレーバーの『アンティゴネ』で際立つのは、捕われたアンティゴネに対して、扇動された「多くの叫び」が「石打ち刑」を要求するにもかかわらず、アンティゴネは「すべての人間は兄弟である」と主張し、「女たち」に向かって「善」による「悪」の裁きを要請する場面である(S.44f.)。そこでのアンティゴネの論拠は、「女」の「性」の賞賛にある(「女よ、子を産め」)、「ブロンドの少女よ、伴侶を選べ」(S.52f.)。

ソポクレスにおけるアンティゴネの刑死は、「戦いながらの死」に匹敵する「美しい死」(カロス・タナトス)とみなされている。⁹⁾ 命懸けの埋葬行為もまたアンティゴネの「戦い」である。このような死は、純然たる心のありようとして「美しい」。これに対して1920年代のアンティゴネ像は意味合いが変えられて、「女」が殺戮の道具ともなる子を産む「性」の象徴として表現される。それは戦いのために「金と息子たち」(S.28)を必要とするクレオンの要請に連動することになり、新たな戦いの犠牲者を生む現実への加担を意味する。しかしアンティゴネは「戦いだ。戦争、敵、名誉とみなが言う—君らの心の声を聞け、略奪された家や冒涇された寺院の塵の中に埋もれて」と戦争の矛盾をつき、その「責任」を民衆の敵対する「心」に求める(S.53)。王族でありながら「一人の女にすぎない」というアンティゴネにも「テーバイのほとんどの罪」があり、民衆とともに「罰」に耐えようとする彼女の正義感が民衆の心をつかむ。とりわけ彼女を称え共感するのは「貧しい者たち」である(S.54)。そのためアンティ

ゴネの「連帯」と「共同」の呼びかけは、反戦に向けた同朋意識の覚醒に成功するが (S.56)、民衆の怒りの矛先は一転してクレオンに向かうことになる。

その契機はアンティゴネの論法にある。クレオンに対しては自分を殺せと挑発しつつ、彼女は真理の到来による王権の終焉を宣言する：「あなたの民はいま私の民だ」、「愛は勝った。／神は我々に恩寵を授けた」(S.60)。これに呼応して、アンティゴネの生存を要求する「声」が「貧しい者たち」において高まる (S.58)。この場面には漸次的に沸点に達する集団のヒステリー状態が表れている。民衆は善悪の判断基準 (S.34) を作り、権力を誇示する「君主」(Herr) クレオンに石打ち刑を要求することで (S.93)、主権者に「殺人者」の烙印が押されるのである。

「悪人が生き、善人たちが死んだ。自分が人間であると誰にまだ言うことが許されるのか」(S.94)。

群衆の中から「一人の若者」が王政を弾劾し、「女たち」はクレオンに弁明を求める。「流血」を煽る無名の「声」が、王の「撲殺」を要求する「群衆」の「叫び」に変わる。このような表現主義の様式に顕著な場面展開、すなわち群衆の激高が殺意のエネルギーに転換する過程は、スケープゴートを立てることによって真相の解明を遠ざけ、問題を短絡的な解決にすり替える一種の倒錯（錯誤）現象である。つまりこの『アンティゴネ』に登場する民衆は、信念を持たず(持てず)共同体に適応してきた者のようにみえる。また「女」が産む「性」ゆえに「誕生と死」ひいては不死性 (S.57) を保証し、失われた命が新たな命に代替され「和解」をもたらすという論理によって、自分の行動の地歩を固めるアンティゴネは扇動者のようにもみえる。王族の人間が平民と同等であり、かつポリスの外にいる女性が女性に特有の論拠を用いて主権者の法を批判し、同時に自責を明らかにすることはポリスでは稀有な思考である。

武力を誇示する王の息子ハイモンはクレオンと同様、父権的な権力志向である。「私の剣の上には男の性(男性性 Männlichkeit)が光を放つ」(S.66)というハイモンは、アンティゴネを愛されるための性である「女」の地位以上にはおかない。王の息子に対してアンティゴネは「弱いものを助け、世界-愛のために戦うことが人間性」であるとして、「人間になれ」と反論する。その根拠は「そなたの星が上るとき、自分が一人の母の息子であ

ることを思え」(S.67)というアンティゴネの女性優位の主張に求められる。アンティゴネによれば人間は「生ある限り死なねばならない」ため、「女」は「狭い性」にとどまるのではなく、服従の状態から主体的な行動へと立ち上がるときを見極めなければならないのである：「感じよ、私たちが女であることを」(S.69)。

以上の点から、アンティゴネやクレオンもまた〈自らの立場〉から「人間」(あるいは「人間性」ということばを強調し、戦争による無実の者たちの死に対する〈責任〉を語る。その際なされる「新しい人間」の創造の要請は、階級や性差を超え出る「人間」への期待であり、過剰なまでの「個」の独我的な主張にもとれる。というのは「世界を変えられない」(S.69)というイスメネやアンティゴネを刑から救うと主張するハイモンから、アンティゴネは人間の剥き出しの感情である「愛憎」を感じ取り、その「愛」や「憎しみ」に突き動かされて、その時々生の実感と生への希望を表明しているからである。

また1920年代にハーゼンクレーバーが提起した「新しい人間」は、権力者に対抗する革命家の輩出を促す状況を招来するものの、その結果は社会構造の変革に至らない段階にとどまっている。このような社会的な背景から、クレオンの「掟」が反戦と戦闘についての自己見解を述べるアンティゴネの「口実」と捉えることも可能である。

とはいえ民衆の視点を導入し、王家の娘アンティゴネもまた民衆の一人にすぎないとする設定に、社会に一石を投じる新たな展開がみられる。それは同時に、革命という名の階級闘争の行き着く先への肯定的かつ否定的な予見でもある。アンティゴネの死後、最終場面で彼女の意思を受け継ぐかのように、民衆の中から一人の「指導者」が登場する。彼はこれまで主権者の命令に唯々諾々と従う受動的な民衆に「革命的な理念」、独裁の終焉による「新世界の到来」を告知する役割を担う次世代の若者である(S.109)。このような展開におけるアンティゴネは、戦争を始めとする、さまざまな社会悪を「罪」として理解し、社会変革の意識を持つ人間の到来を要請する第一人者である。

だが犠牲を生み続ける主権者と愚民との〈共犯関係〉を清算しなければ、アンティゴネがいう「集団の再生」(Kollektive Wiedergeburt)もまた権力構造の再生産にすぎない。何らかの〈犠牲〉を前提に、「神」という名の〈正義〉

を盾に取る人間の欺瞞が、善悪の彼岸においてもなお「人間」の本性につき纏う。オイディプスの犯した行為を端緒にして、「神」の呪いを受け入れ、かつ「人間」の愚かさを認めながら生き続けるという、共同体とその構成員に内在する矛盾は、人間の心が内包する本質的な部分である。それを生み出す社会や共同体の構造自体に、ハーゼンクレーバーは「革命」の必然性をみているように思われる。その意味で『アンティゴネ』は単なる「愛」、「犠牲」、「救済」を謳う物語とは異なる様相を呈している。¹⁰⁾

3

「共同体の権利」が「権力」と無関係ではありえない¹¹⁾以上、アンティゴネやクレオンが没落し、ハーゼンクレーバーによって世界の新しいリーダーが出現しても、権力が暴力に代わる契機は消滅しないものである。

若い世代の一人として第一次世界大戦を体験したブレヒトは、国家の統治権力や合法的支配に疑問を持ち続けた劇作家の一人である。スイスのクール市立劇場で上演するためにチューリヒで改作した『ソポクレスのアンティゴネ』(Die Antigone des Sophokles, Nach der Hölderlinschen Übertragung für die Bühne bearbeitet, 1948)¹²⁾においてブレヒトは、1945年4月のベルリンを古代ギリシアの劇空間の「序景」に配している(Werke 8, S.195-199)。「防空壕」、「戦争」、「軍服」、「SS」(ナチス親衛隊員)による「民族の反逆者」の追求などアンティゴネ神話を異化する要素が、生々しい第二次世界大戦時の記憶を現前化させる。「序景」の登場人物には、二人の姉妹と不在中の「兄」、粗暴な「SSの男」がいる。「SSの男」による「一人の反逆者」、すなわち戦争忌避の罪に問われている不在中の「兄」は、ポリュネイケスと重なるようにみえるが、1945年当時「死刑宣告」された人間を取り巻く状況に、神話的要素が入り込む余地はない。姉妹の家の外で獲物のように杭に吊るされ、殺されていく男の悲痛な呻き声だけが姉妹には聞こえている。¹³⁾ 男の「遺体」を引き取ろうとする「妹」(Die zweite)を制止する「姉」(Die erste)は、「SS」の更なる追求と報復を回避するために利害(命)を優先し無関係を装う。だが、そこに「姉」の一つの問いが残される。それは「死の苦しみを受けても」助けを求めて叫んでいた「兄」を解放するために出ていくべきだったか(S.199)というものである。

この序景はクレオンの戦争を支配者の「権力欲」を満たすための「侵略

戦争」と断じる新しい「プロローグ」へと、1951年に書き換えられている。劇中においても同様の弾劾が、長老たちによる「第四コロス」で強調されている。伝承の神話世界が政治的イデオロギーに基づく、帝国主義的な覇権争いに変貌する様を、ブレヒトは新しい要素として『アンティゴネ』に加え、ナチ時代の現実描写という挑発を行ったのである。アンティゴネ神話を先鋭化するように、ここでの問題は、命の危険を冒して殺されかけている人間を助けることを敢行するか否かである。「姉」、ここでは助けに行こうとしなかった者の答えのない問いは「生き残った者」の罪責として、後に取り上げるグレーテ・ヴァイルの小説『私の姉アンティゴネ』における問題設定に引き継がれている。

クレオンの破滅が決定的になった後、ソポクレスのコロスによる結語には、「卑小な者は生涯破滅なしで過ごす」または「災いから自由になれるのはわずかな時だけである」(V.625)とある。ブレヒトはコロスに代わる長老たちに、強制を可能にする暴君の手は切り落とされたが、クレオンと共に死へ赴くと言わせ、さらに人生を通じてアンティゴネが辛うじて成しえたことが「敵」の救済であり、その敵によって人間は報復されるものであるということを示すことによって、復讐の連鎖を見事に暗示する。敵と味方の止揚されえぬ二項対立を度外視して、埋葬という「神聖な務め」(Heiliges) さえなしえないことはディオニソスへの背信かつアンティゴネの恥辱のはずである。

〈恥〉という人間の感情を〈醜悪さ〉と結びつけて省察する視点は、ヴァイルの『アンティゴネ』の語りにおいても強くみられる特徴である。ここでは暴力に強いられる理不尽な死の醜悪さが、アンティゴネを「醜悪な死」の敢行へと駆り立てていくが、人間の醜悪さという観点では、ブレヒトの長老たちもまた全体主義イデオロギーによる暴政(侵略戦争)を許し、利益を優先する人間の愚かな〈醜悪さ〉を体現する。仮に「卑小な者」が破滅から免れるとしても、悪の不条理に「黙認」(Duldung) することがさらなる「不法行為」(Frevel) を招き、人間にはその口実をいう「時間」さえもないというブレヒトの警告(S.241, V.1293-1333)¹⁴⁾に、ソポクレスの「神聖なる不法行為」との動機の違いと「口実」の捉え方の相違をみることができる。

ソポクレスの『アンティゴネ』において宗教性が美の観念と結びつき、

それらが人間性の神聖さや卑俗さを左右するのに対して、また見方を変えれば正義を貫き、神の英知（思慮）に与るために戦いが許容されているのに対して、ブレヒトの『アンティゴネ』においては、宗教的であれ美的であれその振る舞いにおいて、指標となるべき理念や本来の目的からかけ離れた人間に対する峻烈な省察が第一義であると言わざるを得ない。

4

1941年から1942年の間に執筆されたという、ジャン・アヌイの『アンチゴヌ』(1944)は「現代的転移の典型的な事例」¹⁵⁾とされている。また形式・内容共にソポクレスの『アンティゴネ』とは異なっている。形式においてはコロスに代わり、劇の開始や数回の合間で進行役を務める「代弁者」(Sprecher)が登場する。その中に「乳母」と「姉」が含まれるこの「代弁者」は、観衆に出来事の告知、要約、劇の行き着く先を推測または予告する役割を担う。アンチゴヌと他の登場人物、乳母、姉、クレオン、アンチゴヌの婚約者エモン、衛兵とのそれぞれの対話が筋の枠組みとなる場面を構成する。それぞれのディアロークの中にはアンチゴヌがいる。

アヌイにおいて新たに追加された登場人物の乳母は、アンチゴヌの「母のような役割」を担う。他の作家のアンティゴネ像とは異なり、「瘦せた小さい女の子」と頻繁に形容されるアンチゴヌは、乳母にとっては庇護すべき王家の娘にすぎない(S.11ff.)。その実、アンチゴヌは神の掟に従うことを〈正義〉として、それを貫く〈意志〉を内に秘めた人間である。埋葬の事実が他の登場人物に判明するにつれて、神話上のアンティゴネの死が、アヌイによって「生」への、強制されざる選択による結果として提示されていることも見えてくる。

冒頭のコロスに代わる複数の進行役の導入に続き、アンチゴヌが兄ポリニス一度目の埋葬を決定した後の場面から、アンチゴヌの運命を決定づける時間が開かれていく。そのときからすでに、主体の権限はアンチゴヌにある。法を侵したという「秘密」がまだ発覚していない段階で、乳母との会話において、アンチゴヌから滲み出る内心の動揺、後の彼女の行動(第二の埋葬)によって決定的となる自らの死の暗示、さらに彼女の孤立を深めていくのは、彼女の意思が他者の理解や共感を得られないということに起因する、外界との決定的な距離感である。

この時点でコロスは傍観者であり、人間の運命に介入することすら叶わない。乳母も姉もアンチゴースの熾烈さを無益に制止することしかできない。このような孤立を生み出す要因に、アンチゴースの「全」か「無」かのいずれかを選択せざるを得ない徹底した性格が加わる。劇の中盤におけるクレオンとアンチゴースの対決場面では、双方の見解の相違が感情の激しい衝突に発展する。それは埋葬の最中に、衛兵に捕われたアンチゴースを救済するために、クレオンが説得を試みる場面である (S.35-55)。

クレオンの画策は、埋葬の事実を知る唯一の証人 (Mitwisser) である衛兵を身代わりにして、彼女の罪を隠蔽し、王家の人間アンチゴースを救うというものである。アヌイの設定では、エテオークルとポリニスはともに「ならず者」であり、相続争いで政権転覆を画策していたために、二人の相打ちの結果、判別不能な死体の一方を「英雄」に、他方を「反逆者」に仕立てる以外に、国家の法を維持するための方法がなかったという (S.40ff. S.47f.)。「埋葬の真実」は事の真偽に関わらず政治利用のために (S.45)、きわめて意図的につくられたことになる。

この事実に落胆し、一度はクレオンに従順になったアンチゴースは、彼女のあることばに反応する。クレオンの言う結婚と出産によって得られる女の「ささやかな幸福」を選択することに対して (S.37.S.48f.)、アンチゴースは「自分のために」„nein“ (ノー) を言い放つ (S.49ff.)。それは「純粋な反抗」、「月並みな幸福」や「人生」への「拒絶」であり、行動選択の権利行使という意味で真の「希望」でもある (Vgl.S.51)。

すべての真実を明かさずにはおかない性格は、アンチゴースの潔癖な「無垢な純粋さ」のなせる業である。だがクレオンはそれを、父親譲りの「エディプの高慢」(S.39) であると非難する。興味深いことに「ポリュネイケスは口実にすぎなかった」とクレオンは吐露する (S.53)。そもそも何のための隠蔽であったのかを推測すると、上述した理由に加えて、アンチゴースがクレオンの息子エモンの子を産むことによる王家の血統の維持という政治的な目的のためであり、畢竟クレオンの権力維持に益するという結論にたどり着く。ここに「口実」が内包する不条理と人間性の美醜への問いが浮上する。アンチゴースの „neinsagen“ (拒否発言) が王家の存続を顧みず、自分本位に「死ぬ」ための「口実」であったとクレオンが非難するように、クレオンもまた国家権力を盤石にするために、政治的戦力を

優位にする「口実」を必要としていたのである。

アンチゴーヌの「絶対的な要求」(ほしいものは全か無)のなかに、〈傍観者〉やクレオンの〈共犯者〉になるという選択肢はなく、自己矛盾のない生の欲求が彼女の行動の指針になっている。それにもかかわらず、それゆえにアンチゴーヌは死の間際、自分がなぜ死ぬのか、死なねばならないのかが分からなくなるのである(S.58)。では不条理への馴化を拒否したにもかかわらず、それが自己矛盾をもたらす事態であると判明したとき、彼女はどうすればよかったのだろうか。

衛兵とアンチゴーヌの最後の会話の場面には、彼女の死の無意味さが端的に表れている。妻子のために日銭を稼ぎ、与えられた任務を盲目的にこなすことに拘泥する衛兵は、誰であれ罪人には〈無関心〉である。このような衛兵の粗野で皮相な振る舞いに〈醜悪さ〉を感じざるを得ない、誇り高いアンチゴーヌの自尊心が問題となるのである。

プレヒトの「第四のコロス」(S.228,V.15-19)では、戦争の勝利に依然として浮かれている人間の浅薄さに反して、アンティゴネが高貴な身分から転落して初めて「真実」をみるのが可能になったと言われている:「外の世界に身を置きようやく、自ら盲目になったオイディプスの子供であるアンティゴネは古くて脆くなった」「慣習」という「目隠しを取り、真実の深淵をのぞき込んだ」。

アヌイにおいても、古代から人間の追求すべき課題として「自己を知れ」という命題があるように、現実を知ることが問題にされ、人間の呪われた運命の実体とその醜悪さを直視することではじめて得られる「美」を重視する。

プレヒトやアヌイにおいて問われている〈真実〉は、第二次世界大戦下の社会の現実と直結している。ドイツに占領されたフランスのヴィシー政権下では、レジスタンスや一部の反ナチス分子が弾圧、処刑されていたが、文学作品の検閲は比較的緩和されていたために、戯曲『アンチゴーヌ』は反響を得たという。¹⁶⁾この作品の中で対外的なプロテストに代えて、〈個人〉の〈感情〉を軸に対立の構図を際立たせた点が、他の〈アンティゴネ〉との相違である。つまり、クレオンとアンチゴーヌによる „ja“ と „nein“ (肯定と否定)の二者択一をめぐる個人の感情の衝突をとおして、それ以外の選択肢が与えられない政情を反映すると同時に、古典古代の「美しい死」

に代わる生き方を『アンチゴーン』は呈示する。いわば『アンチゴーン』は意に反して事実を歪曲し、「真実」を偽装する「醜悪さ」が醸成する空間に、風穴を開ける存在なのである。

5

個人の感情すら表出することが許されなかったナチ時代の体験を、戦後漸く言語化した作品の一つに、グレーテ・ヴァイルの自伝的小説『私の姉アンティゴネ』が挙げられる。これは老齢の作家70歳代の「私」(ein weibliches Ich)が1970年代の西ドイツにおいて、その時々を意識に浮上する〈過去の記憶〉を〈現在の意識〉に重ね合わせて語るモノローグ形式の「証言文学」¹⁷⁾である。ヴァイルのアンティゴネもまたギリシア神話の「妥協を知らぬ、抵抗の戦士」(S.16)、「途方もない強さ」を持つ「孤高の存在」(S.107)である。だが、すでに挙げた3つの作品との相違は、アンティゴネがいわばイスメネの立場にあたる「私-語り手」によって、「私」自身の内面にある〈病み〉や〈闇〉の部分深化させ、潜在化する役割を併せ持つ点にある。いわば、アンティゴネは「私」に過去の追体験と検証を迫る存在なのである (Vgl. S.107)。

「私」においては、「ドイツの秋」(1977年以降の西ドイツにおけるテロリズム)の始まり (S.177)が、状況の全てを変えた1933年以降の迫害の経験と結びつく。それは自分たちのものであるはずの「国」、「言語」、「安全」そして「自己のアイデンティティ」さえ奪われた体験をさしている。「ドイツ・ユダヤ人」である「私」には、ナチ時代に通りで強制連行された夫ヴァイキをマウトハウゼン強制収容所で殺害され (S.19)、亡命、ならびに逃亡先のアムステルダムで潜伏し、ナチの脅威を生き延びた過去がある (S.102)。

1942年オランダのユダヤ人評議会で強制移送されるユダヤ人の名簿を作成する仕事を強いられていたために、「犠牲者」(Opfer, S.9)でありながら「私」はナチとの「共犯」意識に苦悩し続けている (S.99-102)。「移送」はアウシュヴィッツのガス室への「輸送」を意味していた事実が戦後判明したからである。とりわけ社会学専攻生の姪クリスティーネや偶然の成り行きから、「私」が一時的にかくまうことになる「ドイツ赤軍派」(Rote Armee Fraktion, RAF) シンバの少女マルレーネは、無造作に戦争責任につ

いて話題にし、「私」の神経をときに逆撫でする (S.138)。「なぜ抵抗しなかったのか」(S.40)と戦時中の不服従と恭順の姿勢を容赦なく疑問視する彼らは、「非合理的な不安に駆りたてられた人間」(私)には「もはや到達できない者」すなわち相互理解に窮する存在に思われる (S.137)。「私」の不安と反発を煽り (S.185)、戦時中の社会規範に「順応させられていない世代」(S.137)の彼らは、「ナチ世代」(私)には「恐ろしい世代」(S.8)なのである。

「私 - 語り手」自身もまた、全体主義イデオロギーや反ユダヤ主義を徹底する殺戮機構の不条理に対して、またその体制を下支えることになる無関心、傍観、黙認を許す人間に対して「憎悪」を募らせる。それは戦後西ドイツ社会の経済的復興の陰で、脱ナチ化や過去の克服と称し歴史認識の究明を曖昧にする風潮や、RAFによる過激化するテロリズムに対しても同様である。そのため1968年以降の学生運動を一つの契機に、世代間の断絶が先鋭化するにつれて、「私」も自己と自分の世代が引き受けるべき責任を問い直さざるをえなくなる。

独裁者に対してアンティゴネのような抵抗を成しえず、いまだ「殺人コンプレクス」(Mein Mordkomplex, S.14)の「トラウマ」(S.41)と殺された「犠牲者」に対する重い罪責感から、「私」は自己の無力さを突き付けるアンティゴネの「秘密」(S.232)を知り、主権者に翻弄され、犠牲を強いられた人間と自分を関連づけ、そこから生きる意味とテロリズムが支配する現代における神話世界の存立の意義を問い直そうと試みるのである。殺された人々の死の「真実」を、生き残った者は想像することができるのか。そのような死の瞬間においても「神話」はその効力を発揮するといえるのか。「イエスマン」(Jasager, S.24)「同調者」(Mitläufer, S.24)ひいては「加害者」(Täter)としての意識が折り重なる「殺人コンプレクス」が解きほぐされるとしても、「私」の生きる社会の中で価値観や経験値の異なる人間と関り、共存することは可能なのか。

「私」は当事者を除き、死の「真実」を知るすべはないと認識しつつも、「私のアンティゴネ」を再生するために「書く」という文学的営為を続けていく。その過程を通じて獲得された帰結は「愛し合うためではなく」、敵を「憎むためにここにいる」(S.76)という「私のアンティゴネ」によって逆転された神話の格率である。

このような意味の変換は、神話のアンティゴネが「私」から独立した存在であるにもかかわらず、「私」なしにはその自律性が維持されえないという「私」の希望のいくばくかを暗示する。あるいは「私」が外界と折り合う手立てとなる第三者として、神話のアンティゴネから導きだされる問題設定や課題への「私」の応答と考えることもできる。

アンティゴネ神話においては主権者の「法に従うことは服従」であり、敵と目された者の埋葬は「反逆行為」であった。だが、ヴァイルの「アンティゴネ」は死者を埋葬することは「反逆のシンボル」ではなく、「人間性のシンボル」とされている。ここに「人間性とはつねに反逆である」(S.244)という論理が導き出される。

確かに「クレオンは国家の体現である。国家がなければ共同体の生活は成り立たない」が、共同体構成員の権利を保障する法制化が適正になされ機能しなければ、権力者は容易に暴徒化し、暴力が権力に代替されかねない。仮に暴力が法制化され常態化した独裁国家において、人間が生き残るには「普遍的な人間性」や理性はときに機能を停止し、その発動権さえ剥奪されねばならないだろう。

そのような事態を回避するために「私」の「アンティゴネ」は作品の最終場面において、手入れによって狩られたユダヤ人たちを選別する場に現れて、ナチへの協力を要請された「私」の前に立ちはだかり、親衛隊に拳銃を向けるのである。この組織化された暴力への闘いが非人間性に対する「私」の抵抗であり、「人間性」を獲得する「反逆」の意味である。このRAFによるテロを容易に想起させる行動は、虚構であるにもかかわらず、「私」の意識の中で同化した「アンティゴネ」によって頓挫させられる。「憎しみ」が人間の本性の一部にあることを知りつつも、「殺人の試み」(Mordversuch, S.232)は「私」の本来の行動原理に抵触するからである。この点において「私」は、「普遍的な人間性」の再生をやはりどこかで願っているのではないかと推察される。そのときの「私」は現実においても、空想においても、暴力から逃亡する以外に生き残るすべはなく、ひたすら逃げ続ける動的場面で物語は閉じられている。

ただし「私-語り手」の不確実な「明日」への、同時に「憎しみ」を受け入れていく覚悟をした自分自身への変更可能性という留保は残されている。

「私は憎しみを感じ、憎しみそのものだ、その流れに取り巻かれ、自分をそれに包み込ませ、受け入れていく、憎しみを、私自身を、私は幸福だ。それで明日は？」(S.252)

真実の解明は不可能であるという一貫した認識のもとに、戦時中の負の体験は克服されるべきものでも、克服できるものでもなく、対峙し続けなければならない問題である。それは傍観者としての立場ではなく、支配者に抵抗の行動ができなかった自分と対峙する当事者として、想像の域を出ない省察を基に、無意識を言語において意識化する行為を通じてなされねばならない、ということが「私 - 語り手」の心の声からは推測される。「私」によって創りだされたアンティゴネから、反戦や戦後社会の膿を表面化させる社会闘争に対するヴァイルの思考を推し量ると、暴力と表裏にある権力に対抗するために、彼女自身は自衛の力（心理的な危機回避行動）を必要としたが、創造されたアンティゴネが発揮しようとした力が自衛とはいえ暴力に替えられたために、その行使を実現不可能に終わらせた、ということである。ということは、やはりアンティゴネは「愛」のシンボルであり続けなければならないのだろうか。

6

「醜悪さ」(Häßlichkeit, S.252) という言葉は小説『私の姉アンティゴネ』で、終わることのない主人公の自己（心理）分析の過程を一時的に締め括る言葉として、語り手自身に関する現在の状況説明に使われている。「私」が醜悪と感じる状況は変わらず、それは過去が変更不可能であるのと同様であることを示している。

ヴァイルの「私 - 小説」(Ich-Roman) は、ナチの暴政を許した 19 世紀的な思考カテゴリーを、いわゆる「普遍的な人間性」の実践を、権力への盲従を教えることによって歪曲する権力構造を脱構築したいと思いながら、そこから脱却する術を模索する。暴力に墮す権力行使を「私」はいまだ許容しないにもかかわらず、神話的形姿のアンティゴネを逆説的に捉えることを、「私」の創作においても生存においても〈人間の条件〉として必要とした。それを神話世界への不可能な退行とみるか、人間の本性の「醜悪さ」を「美」の存続のための対極として、すなわち醜悪な世界を生きぬく原動力として持ち続けることを提起するものなのか。

ソポクレスのオイディプスは主権者として法の創設を問題にし、¹⁸⁾ 自らの法に従い、自らに課された〈真実〉を暴き、それにより神々からかけられた一族の呪いの幕を開けた。オイディプスの娘であり妹でもあるアンティゴネは神々の法に従い、人としてなすべき宗教的な儀礼を成し遂げたのち縊死し、クレオンも没落した。為政者の法に抵抗するか盲従するか、いずれの場合も災いは生じる。「思慮」をもってしても人間の欲望は底知れない。「美しい死」と「醜悪な生」。オイディプスのように「真実」に衝迫する必然性を自覚せず、さもなければ „Mitwisser“（犯罪や秘密を与り知る者）に恣意的にとどまるだけの無関心。その凡庸で狡猾な非人間的なありようは恐怖に支配された戦時中とは比肩されえないとはいえ、抵抗できない「醜悪さ」と敢えて変革しない「醜悪さ」の自覚には大きな心性の隔りがある。

ハーゼンクレーバーがもちいた「心」は表現主義の常套的図式に当てはめれば、「身体」と「精神」の媒介であり、「心」の過剰な干渉は大衆のヒステリーに通じる危険がある。それにもまして「心」が欠落すれば人工的な「神」を僭称する支配者に踏みにじられるのは被抑圧者である。ハーゼンクレーバーにおける人間同士の「連帯」の呼びかけは、ヴァイルにおいてナチの戦略への批判検証に発展している。それは抵抗させないために争いを利用し人間同士を分裂させ続け、一部に「漁夫の利」を得させて「連帯」を妨げる（S.28）という洞察である。

利害なしに他者を「助ける」というカントの定言命令の実践を試すような、ブレヒトの「序景」における「姉」の迷いは、ヴァイルの場合の結果論への後悔に連動するものであるが、前者には人間の脳裏に浮かぶ直観が、のちに悔いとなって心に禍根を残すという警告がある。この警告は、当然そのような先見の明が閉ざされた閉塞状況では、作品の結末にあるように、人間は「時間」を所有できない生きものであり、死後に考えよというブレヒト的な逆説の伏線であるともいえる。人災を回避するために悪に傾倒した人間の道義的責任を正すかのように、無意識的な人間の行動心理に焦点を当てたヴァイルの「私-語り手」は、神話と現実の両輪に自分自身をたたせ、現実の自分が生き続ける意味を探った。その際「犠牲者」と「加担者」双方の視点を持つ者が、自らの体験の言語化を試みている点は注視すべきである。

『私の姉アンティゴネ』にはポーランドのペトリカウで行われたSSによるユダヤ人の集団殺戮に関する、下士官フリーデルの手記¹⁹⁾が証言として挿入されている。そこにはペトリカウのゲットー撤退に際して、ゲットーの痕跡を一時的に隠蔽するために、そこで射殺された収容者（病人、老人、女、子供）をSSが土に埋める記録が記されている（S.187-223）。その一連の行為において、フリーデルは殺される直前の人々と同様に、一種の麻痺状態、得体のしれない事態に感覚を奪われるときのような状態に陥っている。

この隠蔽行為の挿入には、これと対比されるべきアンティゴネの埋葬行為や神話の意味を解釈しなおす「私-語り手」（ヴァイル）の真意があるように思われる。「神々は人間から何も奪ってはいない」というアンティゴネ神話の事実に対して、人間から命の尊厳を奪う者が人間自身であることに思い至れば、自ずと見えてくるものがある。依然として社会に寄生する悪やそれを濫用し、利権にしがみつく人間の本性に対して、抵抗を考えない「醜悪さ」の対極に位置するのがヴァイルのアンティゴネなのである。

他人による意思決定の恣意性を拒否したアヌイのアンチゴヌの生き方が、20世紀初頭のホーフマンスタールにおけるアンティゴネの美学と通じるように、ホーフマンスタールにおける現実に裏打ちされた芸術における纯粹美学の追求は、²⁰⁾アヌイにおいて、個人が「美」の信念に基づいた行為を成し遂げる論拠とされている。このようにそれぞれの時代で示されたアンティゴネの例を見てきたが、ハーゼンクレーパーが強調した人間の「心」、ブレヒトが「序景」で問うた「死を賭けた助力」、アヌイの「ノーという勇氣」、ヴァイルの「生き延びる」という姿勢—それらすべてが「抵抗」のかたち、抵抗に必要な要件であり、それぞれの時代で発せられた人間性への警告なのである。

テキスト

本論中で使用したテキストの引用箇所には頁数、または詩行数を括弧内に示した。Hasenclever, Walter: *Antigone*. Fünfte Auflage, Berlin 1918. www.Forgotten Books. Com. London 2015.

Brecht, Bertold: *Werke*. Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe. Hrg. von Werner Hecht, Jan Knopf, Werner Mittenzwei, Klaus-Detlef Müller. Band 8.

Suhrkamp Verlag, Erste Auflage, Frankfurt am Main 1992.

Anouilh, Jean: Antigone. Hrg. von Franz Geier. Langen Müller, München 2015.

Sophokles: Antigone. Griechisch/Deutsch. Übersetzt und herausgegeben von Norbert Zink, Reclam Stuttgart 2015.

Ders.: Antigone. ReclamXL. Text und Kritik, übersetzt von Kurt Steinmann und herausgegeben von Mario Leis und Nancy Hönsch, Dizingen 2016.

Weil, Grete: Meine Schwester Antigone. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 2000.

その他参照テキスト

Anouilh, Jean: Antigone Reclam Fremdsprachentexte. Hrg. von Dieter Meier. Dizingen 1988. Originalausgabe der Dramen von Anouilh sind im Verlag La Table Ronde, Paris 1942.

Sophokles: Antigone. Übersetzt von Wilhelm Kuchenmüller, Reclam Stuttgart 2000.

注

- 1) Steiner, George: Die Antigonen Geschichte und Gegenwart eines Mythos, München 1990. S.343.
- 2) Sophokles: Antigone. Griechisch/Deutsch. Übersetzt und herausgegeben von Norbert Zink, Reclam Stuttgart 2015. S.11. (以下①と標記)
Ders.: Antigone. Reclam XL. Text und Kritik, übersetzt von Kurt Steinmann und herausgegeben von Mario Leis und Nancy Hönsch. Dizingen 2016. S.9. (以下②と標記)
- 3) Ebd. アンティゴネは高貴な生まれである。主権者の法により禁じられた行為の発覚による刑罰死（石打ち）を彼女は「美しいこと」と理解している。古代ギリシアに存在していた「美しい死」の観念は、生のそれと表裏の関係にある。つまり、埋葬行為は刑死と等価値を持つ「美しい行い」である。注9)を併せて参照されたい。
- 4) Sophokles (①) : Antigone., a.a.O., S.13. Ders. (②) : Antigone., a.a.O., S.10.
- 5) Ders. (②) : S.26.
- 6) Ders. (①) : S.45.
- 7) Ders. (①) : S.107. Ders. (②) : S.57.
- 8) 1917年ベルンハルト・ケラーマン (Bernhard Kellermann, 1879-1951) によ

り、この作品にクライスト賞が授与される。ハーゼンクレーバーは1914年に自由志願兵として従軍し、戦争の残虐性を目の当たりにして神経を病み、1916年にドレスデンのサナトリウムへ入所する。戦争不適格者とみなされ1917年に除隊宣告するが、愛国者として書かれた作品には、自身の戦争体験と反戦意識が反映されていると推察される。戯曲『アンティゴネ』は1920年ベルリンで、マックス・ラインハルト (Max Reinhardt, 1873-1943) により上演される。また1924年以降、表現主義作家として時代批判的な喜劇を上演し、彼は大成功を収めている。1933年ナチにより市民権が剥奪され、彼はイギリス、イタリア、フランスへ亡命するが、フィレンツェ滞在中ヒトラーのイタリア訪問時に、イタリア警察により逮捕される。「敵性外国人」としての烙印が、彼の迫害への不安というトラウマを植え付けることになる。1940年ドイツの進軍に直面し、ペロナールの過剰服用により、ハーゼンクレーバーは自死に至る。Vgl. Budde, Bertold (Hg.): Harenberg Literaturlexikon. Autoren, Werke und Epochen; Gattungen und Begriffe von A bis Z, Dortmund 2000. S.441. Brauneck, Manfred (Hg.): Autoren Lexikon deutschsprachiger Literatur des 20. Jahrhunderts, Hamburg 1995. S.299f.

- 9) 吉武純夫：ギリシア悲劇と「美しい死」名古屋大学出版会 2018. 19頁
古代ギリシア人にとって「死をよしとする」事例は、以下の5つである（13～14頁参照）。その中の「〈葬礼が正しく施されること〉がよしと評価される場合」に「アンティゴネ」が該当する（19頁）。その他の分類として挙げられている4項目は、次の通りである。1〈よき状態をもたらすもの〉として死が評価される場合。2〈果敢な従事態度の証し〉として死が評価される場合。3〈死ぬときの周辺状況〉によって死のよしあしが評価される場合。4〈その死に問題がないこと〉がよしと評価される場合。「よき死」、「カロスなる死」は大局的にみて「美しい死」という意味範疇に入れられることが、吉武氏の考察において解明されている。
- 10) ハーゼンクレーバーによる『アンティゴネ』の目的については、以下の文献の指摘による。1929年10月11日付けの書簡によると、『アンティゴネ』の詩作には政治的な目的がある。その課題は古代の衣装に包まれた愛と人間性の形姿を創り、個人の運命を普遍的なものに止揚して、古代の神話に新しい内容を与えることである。悲劇はクレオンとその支持者に体现された力の原理に対する闘いの叫びとなる。アンティゴネの犠牲の死は理

念の勝利であると同時に、誤った無力な民を救済する勝利を意味する、というものである。Müller-Seidel, Walter: Antigone im deutschen Expressionismus: Tragik im Verständnis Hegels und der Moderne. In: Genio huius loci : Dank an Leiva Petersen, hrg. von Dorothea Kuhn und Bernhard Zeller, Wien [u.a.] 1982. S.363-389. Hier, S.382. Hasenclever: Artikel Antigone, S.316.

- 11) フロイト 中山元 訳：人はなぜ戦争をするのか 光文社古典新訳文庫 2008. 14～15 頁

- 12) Barner, Wilfried: „Durchrationalisierung“ des Mythos? Zu Bertolt Brechts »Antigonemodell 1948«. S.191-210. In: Zeitgenossenschaft. Zur deutschsprachigen Literatur im 20. Jahrhundert. Festschrift für Egon Schwarz zum 64. Geburtstag. (Hg.) Paul Michael Lützel in Verbindung mit Herbert Lehnert und Gerhild S. Williams, Frankfurt a. M. 1987.

1917年12月16日 „Arbeitsjournal“ にプレヒトは、〈アンティゴネ〉はアメリカ亡命から古きヨーロッパへの帰国後初めての脚本であり、戦争により精神的かつ物理的に崩壊された文化領域に、「新しい手法」で「新しい演劇文化」を促進したいと記している（S.191）。古典古代の戯曲における抵抗の偉大な形姿が、ドイツの抵抗の戦士を代表するわけではない。神話の枠組みを残しつつ、「人間の運命」を「神々の運命」から除去し、「神々の問題を克服」することが「合理化」を貫徹するための手法なのだろうかという問題が浮上する（Vgl.S.193）。

- 13) 「序景」（1948年）の内容は、作品の登場人物、出来事と現実の過去との関連に基づく。1944年6月20日に抵抗した将校たちをヒトラーがフックにつるし、彼らの死闘の様子を映像に収めて鑑賞したという史実が指摘されている。異化効果のコンセプトについて注目すべき解説として、以下を挙げる。「異化効果の、本物の、深い決定的な適用の前提は、社会がその状態を歴史的なもののみならず、改善可能とみなすことである。真の異化効果は戦闘的な性格を有する。」Fritsch, Gerolf: Antigone und die dreifache Vernunft. In: Einspruch: Zeitschrift der Autoren. 4. 1990. H.20. S.7-12. Hier, S.8.

この説明から「序景」の筋立ては、劇空間に挑発や反発を生み出すものと考えられる。

- 14) Hamburger, Käte: Von Sophokles zu Sartre, Griechische Dramenfiguren antik und

modern, Stuttgart 1962. S.208. (以下、引用者による部分的補足あり) ハンブルガーもまたハーゼンクレーバー、プレヒトのアンティゴネを「抵抗の形姿」とみなして、双方が描かれた1917年から1947年という時間の隔たりに注目する。プレヒトはヘルダーリンの翻訳を改編し、ソポクレスのアンティゴネを古典ドラマの「抵抗の偉大な形姿」と名付けたが、同時に1947年にはアンティゴネの詩は書かれえなかったとハンブルガーは指摘する (S.208f.)。ナチ時代を経験した人間には知られている抵抗の概念は、アンティゴネの抵抗とは何の関係もなく、主人公との自己同定にはいたらない。歴史的な時間の隔たりがあることは本質的要件ではないかもしれないが、「アンティゴネが代表する抵抗の形式それ自体」、つまり「暴君との個人的な対決」、法の侵犯という「単純な行動」は抵抗を維持するうえで、「全体主義の独裁国家」においては不可能である (S.209)。クレオンとアンティゴネの関係と対決の中にみられる「人間的 - 人格的要因」(das [...] human-personale Moment) も1947年には決してアンティゴネとの同一視を可能にしない要因である。従ってプレヒトの目的は、アンティゴネを不可能な形姿として理解させることにある (下線部は引用者による) (S.209f.)。

Vgl. Brecht, Bertolt: Die Antigone des Sophokles, Zur „Antigone des Sophokles“, Vorwort zu „Antigonemodell 1948“. S. 363-370, Hier, S.364. In: Schondorff, Joachim (Hg.): Antigone. Albert Langen, Geroge Müller, München Wien 1966.

- 15) ジェラルド・ジュネット 和泉涼一 訳：パランプセスト - 第二次の文学 水声社 1995. 557頁
- 16) Anouilh, Jean: Antigone. (Hg.) Dieter Meier. Reclam Fremdsprachentexte, Stuttgart 2017. S.106. 1944年8月パリ解放後、1944年2月4日パリモンマルトルのアトリエ座 (テアトル ドゥ ラトリエ Théâtre de l'Atelier) にて初演。この日付は、岩切正一郎：ジャンヌヌイと『アンチゴース』では2月13日と記載されている (カタログ「アンチゴース」株式会社パルコ エンタテインメント事業部編集発行 2018年所収)。同カタログによると、上演当時のフランス国内ではレジスタンスグループが「敵性外国人」、あるいはナチの言う〈テロリスト〉として逮捕、処刑されていたのに対して、パリ解放後は、レジスタンスが神格化された。そのため特に疑問視されたのが、アンチゴースがなぜ自分の為に死ぬのかという点である。そのような批判は本作品を「ドイツ占領軍に奉仕する作品」と目するものである。このように戦中と戦後

では、本作品の反響や評価における差異と両義性が見られる。レクラムの『アンチゴース』には、パリ解放後も上演が成功し、親ヴィシー政権派や政権協力者、レジスタンス側ともに反響があった事が言及されている (S.116)。

- 17) Lamping, Dieter: Von Kafka bis Celan. Jüdischer Diskurs in der deutschen Literatur des 20. Jahrhunderts, Göttingen 1998. S.113-128. グレーテ・ヴァイルの経歴を簡単に記すと、彼女はオーバーバイエルン、ロタッハ-エガーン (Rottach-Egern) に生まれ、ベルリン、ミュンヘン、フランクフルトでゲルマニスティック等を選び、1932年に結婚した夫エドガー・ヴァイルがマインツで逮捕されたのを機に、オランダへの亡命を決意する。生計を立てるためにグレーテは、ミュンヘンで写真家の修業をする(1935年)。本作品におけると同様に、夫がオランダの路上でユダヤ人狩りに遭遇し、マウトハウゼン強制収容所で殺害される(1941年)。潜伏生活を経て、彼女はドイツへ帰還(1947年)、ミュンヘンで執筆を続ける。最後の小説『花嫁の代価』(Der Brautpreis, 1988)にシヨル兄妹賞 (Der Geschwister Scholl-Preis) が授与されている。Exner, Lisbeth: Land meiner Mörder, Land meiner Sprache. Die Schriftstellerin Grete Weil, München 1998. S.123-127.

また作品解釈の詳細については、拙論グレーテ・ヴァイルの『私の姉アンティゴネ』を参照されたい。浅野 洋 濱野 英巳 若林 恵編：『光野正幸還暦記念論文集』所収 2012. S.187～210 頁

- 18) 蓮實重彦 渡辺守章 監修：ミシェル・フーコー思考集成 V 1974-1975 権力 処罰 筑摩書房 2000. 111～151 頁所収参照。
- 19) Uhde, Anne: „Todesblätter aus Petrikau Grete Weils Erinnerungen an die Nazi-Zeit“ In: Die Welt, 27. 9. 1980.
- 20) Hofmannsthal, Hugo von: Vorspiel zur Antigone des Sophokles. Gesammelte Werke. Dramen III 1893-1927, Fischer, Frankfurt am Main 1979. S. 477-484.
- これはソポクレスの『アンティゴネ』を、上演する際の導入として想定された序曲である。その前半部において『アンティゴネ』の上演を準備する学生二人、ヴィルヘルム (「学生第一」) とハインリヒ (「学生第二」) が「精霊」(Genius) と呼ばれる未知のものと遭遇し、「新人」のヴィルヘルムが「精霊」と対話する。「知らせ」を携えたギリシア時代の「使者」(S.480)である「精霊」は、「虚構の世界」すなわち舞台上に作られたギリシア時代を映し出す書割を住处とし、時空を超越する「秘密に満ちた基本要素」(S.478)とされている。

序曲の後半部からは、「精霊」を通してアンティゴネが崇高な影の形象として、死へ向かう高貴な女戦士のように描かれる。「あの人を見れば、この脆い肉体は／崩れてしまう、火のなかの灰のように。／（後に残り）動き出すのは、僕の中の不滅のもの。」(S.484) アンティゴネの不滅な精神性が「学生第一」の内部に移入し、彼の現身を圧倒する。このように「(城の)内と外」、人間の内面と外界の呼応を通して、過去の現象が再生されていく。それは演者には「何一つ助けること」も「変える」こともできない、恐ろしい現実である。だが、それを「見て、知らねばならない」(下線部は引用者による)(S.483)とホーフマンスタールは主張する。このような視覚的体験から、〈目に見えないもの〉を可視化する20世紀初頭に顕著な文化表象の試みに加えて、不可変な恐ろしい事象に「なぜ関与しなければならないのか」(S.484)という芸術家の葛藤が、美的現象の現実化(S.480)に対する確信と使命とともに展開されている。

参考文献

- Brecht, Bertold: Zu „Die Antigone des Sophokles“. In: Werke. Band 8. Bertold Brecht Schriften 4. Text zu Stücken, 1991. S.566f.
- Ders.: Zu „Die Antigone des Sophokles.“ In: Gesammelte Werke. Schriften zum Theater 3. Anmerkungen zu Stücken und Aufführungen 1918-1956, Suhrkamp Verlag 1967. S.1211-1220.
- Flashar, Hellmut: Durchrationalisierung oder Provozieren? Brechts Antigone, Hölderlin und Sophokles. In: Das fremde Wort. Studien zur Interdependenz von Texten. Festschrift für Larl Maurer zum 60. Geburtstag, hrg. von Ilse Noltings-Hauff und Joachim Schulze. B. R. Grüner, Amsterdam 1988. S.394-410.
- Fritsch, Gerolf: Antigone und die dreifache Vernunft. In: Einspruch: Zeitschrift der Autoren. H.20 4. 1990. S.7-12.
- Jens, Walter: Sophokles und Brecht Dialog. In: Zur Antike. Kindler, München 1978. S.415-433.
- Knopf, Jan: Brecht-Handbuch Theater Eine Ästhetik der Widersprüche, J.B.Metzler, Stuttgart 1980. S.271-280. (Die Antigone des Sophokles)
- Wüthrich, Werner: Die *Antigone* des Bertolt Brecht. Eine experimentelle Theaterarbeit, Chur 1948 Unter Mitarbeit von Eberhard Elmar Zick, Zürich 2015.

- Meyer, Herbert: Walter Hasenclevers „Antigone“ S.161-170. In: Zeit der Moderne zur deutschen Literatur von der Jahrhundertwende bis zum Gegenwart, hrg. von Hans-Henrik Kurrmacher, Fritz Martini und Walter Müller-Seidel, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart 1984. S.162.
- Die Scene. Blätter für Bühnenkunst. 19/10. Hrsg. V. Der Vereinigung künstlerischer Bühnenvorstände e. V. Berlin 1929. S.316 (Hasenclever :Artikel Antigone).
- Hölderlin, Friedrich: Sämtliche Werke. Hrg. von Friedrich Beissner, Insel, Anmerkungen zur Antigone, S.124.
- Knapp, Gerhard P.: Die Literatur deutschen Expressionismus. Einfühlung – Bestandsaufnahme – Kritik, C. H. Beck, München 1979. S.118f.
- Königs Erläuterungen „Antigone Ein Mythos und seine Bearbeitungen“, C. Bange Verlag, Hollfeld 2009.
- Vosshage, Frauke Frausing: Königs Erläuterungen und Materialien. Interpretation zu Jean Anouilh Antigone, Band 388. C. Bange Verlag, Hollfeld 2010.
- Kulder, Birte: Die literarische Verarbeitung des Antigone-Mythos im deutschen Theater des 20. Jahrhunderts, Diplomata GmbH, Hamburg 2002. S.48-62.
- Antigone im Dritten Reich Grete Weil (*1906) Sophie Scholl (1921-1943) in: Irms Hildebrandt, Bin halt ein zähes Luder 15 Münchner Frauenporträts, Eugen Diederichs Verlag, München 1990. S.203-224.
- (Hg.) Arnold, Heinz Ludwig: Text-Kritik Zeitschrift für Literatur, IV/09. 182 Grete Weil, 2009.
- Torberg, Friedrich: Mein ist die Rache, Erzählungen, Frankfurt am Main, Berlin 1986, S.7-54. In: Steinlein, Rüdiger: Der Tod ist ein Meister aus Deutschland, S.43-62. In: Shoah in der deutschsprachigen Literatur, hrg. von Norbert Otto Eke / Hartmut Steinecke, Erich Schmidt Verlag, Berlin 2006.
- Ders.: Mein ist die Rache, Novelle. Hrg. von mit einem Nachwort und einer Zeittafel von Marcel Atze, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 2008.
- Weil, Grete: Leb ich denn, wenn andere leben, Zürich/Frauenfeld 1998.
- ソフォクレス 中務 哲郎 訳：アンティゴネー 岩波文庫 2016.
- ジャン・アヌイ 鈴木 力衛 芥川 比呂志 訳：アンチゴヌ アヌイ名作集 白水社 1988.
- プレヒト 谷川 道子 訳：アンティゴネ 光文社古典新訳文庫 2015.

ルネ・ジラール 織田 年和 富永 茂樹 訳：身代わりの山羊 法政大学出版局
2010.

ルネ・ジラール 小池 健男 訳：世の初めから隠されていること 法政大学出版局
2015.

カント 中山 元 訳：永遠平和のために／啓蒙とは何か 光文社古典新訳文庫
2006.

松山 壽一：悲劇の哲学—シェリング芸術哲学の光芒 叢書シェリング入門 6 萌
書房 2014.